

日本の名作名文ハイライト

# 女生徒

太宰治

朗読 wis

出所 【朗読】声を便りに、声を頼りに——。

<http://18.art-studio.cc/~koenoizumi/>

teabreak 編

## 女生徒

太宰治

あさ、眼をさますときの気持は、面白い。かくれんぼのとき、押入れの真っ暗い中に、じっと、しゃがんで隠れていて、突然、でこちゃんに、がらっと襖をあけられ、日の光がどつと来て、でこちゃんに、「見つけた！」と大声で言われて、まぶしさ、それから、へんな間の悪さ、それから、胸がどきどきして、着物のまえを合せたりして、ちよつと、てれくさく、押入れからでてきて、急にむかむか腹立たしく、あの感じ、いや、ちがう、あの感じでもない、なんだか、もっとやりきれない。箱をあけると、その中に、また小さい箱があって、その小さい箱をあけると、またその中に、もっと小さい箱があって、あつて、そいつをあけると、また、また、小さい箱があつて、その小さい箱をあけると、また箱があつて、そうして、七つも、八つも、あけていって、とうとうおしまいに、さいころくらいの小さい箱がでてきて、そいつをそつとあけてみて、何もない、からっぽ、あの感じ、少し近い。パチツと眼がさめるなんて、あれは嘘だ。濁って濁って、そのうちに、だんだん殿粉が下に沈み、少しずつ上澄ができて、やつと疲れて眼がさめる。朝は、なんだか、しらじらしい。悲しいことが、

たくさんたくさん胸に浮かんで、やりきれない。いやだ。いやだ。朝の私は一ばん醜い。両方の脚が、くたくたに疲れて、そうして、もう、何もしたくない。熟睡していないせいかしら。朝は健康だなんて、あれは嘘。朝は灰色。いつもいつも同じ。一ばん虚無だ。朝の寢床の中で、私はいつも厭世的だ。いやになる。いろいろ醜い後悔ばかり、いちどに、どっとかたまって胸をふさぎ、身悶えしちやう。

朝は、意地悪。

お父さん」と小さい声で呼んでみる。へんに気恥ずかしく、うれしく、起きて、さっさと蒲団をたたむ。蒲団を持ち上げるとき、よいしょ、と掛声して、はっと思った。私は、今まで、自分が、よいしょなんて、げびた言葉を言い出す女だとは、思ってたなかった。よいしょ、なんて、お婆さんの掛声みたいで、いやらしい。どうして、こんな掛声を発したのだろう。私のからだの中に、どこかに、婆さんがひとついるように、気持がわるい。これからは、気をつけよう。ひとの下品な歩きかっこうを顰蹙していながら、ふと、自分も、そんな歩きかたしているのに気がついた時みたいに、すごく、しよげちやった。

朝は、いつでも自信がない。寝巻のまままで鏡台のまえに座

る。眼鏡をかけないで、鏡を覗くと、顔が、少しぼやけて、しっとり見える。自分の顔の中で一ばん眼鏡が厭なのだけれど、他の人には、わからない眼鏡のよさも、ある。眼鏡をとって、遠くを見るのが好きだ。全体がかすんで、夢のように、覗き絵みたいに、すばらしい。汚ないものなんて、何も見えない。大きいものだけ、鮮明な、強い色、光だけが目にはいつて来る。眼鏡をとって人を見るのも好き。相手の顔が、皆、優しく、きれいに、笑って見える。それに、眼鏡をはずしている時は、決して人と喧嘩をしようなんて思わないし、悪口も言いたくない。ただ、黙って、ポカンとしているだけ。そうして、そんな時の私は、人にもおひとよしに見えるだろうと思えば、なおのこと、私は、ポカンと安心して、甘えたくなって、心も、たいへんやさしくなるのだ。

だけど、やっぱり眼鏡は、いや。眼鏡をかけたら顔という感じがなくなってしまう。顔から生れる、いろいろの情緒、ロマンチック、美しさ、激しさ、弱さ、あどけなさ、哀愁、そんなもの、眼鏡がみんな遮ってしまう。それに、目でお話をするとということも、可笑しなくらいできない。

眼鏡は、お化け。

自分で、いつも自分の眼鏡が厭だと思っているゆえか、目

の美しいことが、一ばんいいと思われる。鼻がなくても、口が隠されていても、目が、その目を見ていると、もっと自分が美しく生きなければと思わせるような目であれば、いいと思っている。私の目は、ただ大きいだけで、なんにもならない。じっと自分の目を見ていると、がっかりする。お母さんでさへ、つまらない目だと言っている。こんな目を光のない目と言うのであろう。たどん、と思うと、がっかりする。これですからね。ひどいですよ。鏡に向うと、そのたんびに、うるおいのあるいい目になりたいと、つくづく思う。青い湖のような目、青い草原に寝て大空を見ているような目、ときどき雲が流れて写る。鳥の影まで、はっきり写る。美しい目のひとつとたくさん逢ってみたい。